

もう9年も前のことですが、ある青年から質問されたことがあります。彼のことは小学生の頃から知っているのですが、大人になると難しい質問をしてきます。「信仰生活で言われる喜びとは何か？」というのを聞いてきました。

「喜び」ということで、基本的なことが、ふたつ頭に浮かんだので、それを答えました。ひとつは、前に日曜学校で使っていた「こども教理問答」という本に書かれていたことです。この本は、イギリスのプロテスタント教会が中心になって作ったウェストミンスター小教理問答書を元にして、こども用に解説したのですが、最初にこんなことが出て来ます。

問1 わたしたちは、何のために生きるのですか？

答。わたしたちは、神さまの栄光をあらわし、神さまを永遠に喜ぶために生きるのです。

「神様を喜ぶ」というのは、ちょっとわかりにくい表現かもしれません。神様を喜ばせるのではありません。神様の存在が私にとって喜びになる、ということで、神様の恵みとか力を自分が感じて、神様との関わりで、自分の中に喜びがわいてくることだろうと思います。

この問1の問答の続きに次のような解説があります。

=====

人間と、動物は、どこがいちばんちがうのでしょうか。人間は、ことばをしゃべるが、動物はしゃべらない？人間は、知恵があるが、動物は知恵がない？いいえ、そうではありません。アリは、不思議な方法で、おいしい砂糖のある場所を仲間に教えることができます。コウモリは、人間にも作れないものすごいレーダーをもっていて、暗闇もスイスイと飛び回ります。

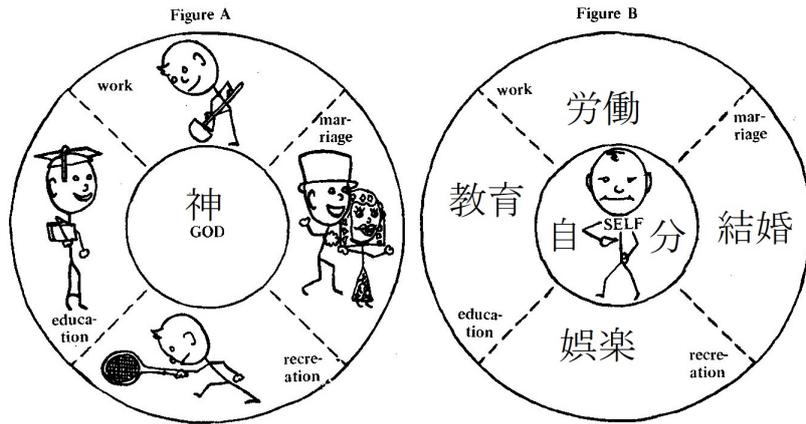
動物たちの中に絶対がないこと。それは神さまを礼拝することです。動物園でサルたちが、日曜日に礼拝しているのを観たことはありません。わたしたち人間だけが、わたしたちを愛してくださる神さまを礼拝し、自分から神さまの栄光をあらわすことができるのです。栄光をあらわすとは、月が太陽の光を反射して光るように、神さまのすばらしさを、私たちの言葉や行いに反射させることです。

=====

このような内容でした。

人間は、他の動物たちと同じように、仲間と連絡をとることは、よくやっています。しかし、動物にはなくて、人間にだけ見られる行動は、礼拝することだと、著者は言っています。そして神様の素晴らしさを人々に知らせ、そのことを喜ぶことが、人間に与えられた目的なんだ、と説明しているのです。

私はこの説教を3年前に作っていたのですが、数日後、本を読んでいて、大変感動したことがありました。それは、感謝するという英語。ありがとうを「Thank you」と言う。そのサンクという言葉と、考えるという「Thinking time」問題が出た時、回答するまでの時間を「シンキング タイム」と言いますね。この感謝 サンクという言葉は、考える シンクという言葉は同じ根っこから来た言葉らしい。



つまり、サンク (thank) はシンク「think」(考える、思う)に通じ「サンキュー (Thank You)」は、「あなたのことを思ってますよ」ということであり、「あなたからのご恩(親切)を忘れていませんよ」といった心なのでしょう。人間だけが自分を造った神様のことを知っている。それを忘れたら、つまり考え

るのを停止したら、感謝も出てこないというわけです。神様のことを考えたら喜びがわいてくるということです。この絵は大人向けのウェストミンスター小教理問答の挿絵です。左は本来の人間の姿だが、神様を忘れて自分が中心の生き方をしたなら、神様への恩も感じないから、感謝もおこらないし、自己満足だけの生き方になる、と説明します。

でも、それじゃ、具体的にどんな生き方をすることなのでしょうか？

それで、私は、聖公会のカテキズムの中で、お祈りに大切なことを喜び (JOY) という言葉で解説している箇所を思い出したのですが、喜び (JOY) という言葉を、このように説明しています。

J=Jesus First イエスが第一
 O=Others next 他者がその次
 Y=Yourself last あなた自身は最後

私たちの、礼拝とか祈りなどで、いつも意識しておかなければならないことは、まず神様のことを第一にし、次に隣人のことを考え、自分のことは後回しにすることが、喜びに溢れる生き方だ、という話でした。それは礼拝や祈りだけでなく、私たちの行動も、その優先順位で行なう時、幸福になれる、ということです。

もう十年以上前に読んだ心理学の本ですが、人間はどのように生きたら、充実した生活ができるか、というテーマで語っていました。特に現代人は、自分が「喜び」と言いますか、気持ちよくなれるために、いろんな工夫をする。手っ取り早く充実感を味わうために、麻薬やアルコール、セックスなどにそれを求める。それは瞬間的な快樂であって、長続きしないんです。それで、また同じことを繰り返す、というわけですが、そのような刹那的な快樂を求めていると、結局、自分の体や心をズタズタに傷つけてしまう。しかし、それとは反対に、持続性のある充実感。それは、周りの人を助けることであって、これを行った時には、自分にも自信がつくし、そこで得られる喜びは、ずっと余韻を楽しむことができる、ということです。

そして、目の前の困っている人を助けることは、神様に奉仕することになる、とマタイ25章あたりでは教えています。

私たちは、自分の名誉や利益のために働くのは、何か競争で勝ちたい、という気持ちがあって、それが得られた時は、嬉しい反面、後ろめたい気持ちになることがあります。しかし、それに対して、他の人を助ける、というのは、自分の存在意義を確かめられて、喜びが長続きするし、相手にも素直に喜ばれることだ、というわけです。

今日の福音書は、イエス様が弟子たちに、ご自分が何者だと考えているのか、と質問した話でした。ペトロはそれに対して、「神からのメシアです。」とだけ、応えています。するとそのあと、イエス様はそのことをだれにも言わないように戒められました。そして、ご自分がユダヤの指導者たちによって殺され、復活することを語られました。他のマタイやマルコの福音書では、ペトロが「そんなことがあってはならない。」と諫めるんですが、イエス様から「引き下がれ、サタン。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている。」とお叱りを受ける話を想像します。ところが、ルカだけはその部分が消えています。でも、そのあと、自分の十字架を背負って来い。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救う。」というお話に展開しています。

どうして、イエス様が、ご自分のことを「メシア」だと言わないように戒められたのかは、みなさんよくご存知でしょう。

弟子たちは、イエス様に、強い、政治的な指導者を期待していたのでしょう。ユダヤ人指導者から排斥されたり、殺されたりするような、弱い指導者など、期待していなかったのです。だから、他の福音書が書き残しているように、『そんなことがあってはなりません。』と諫めてしまうんですね。世間的に評判のいい、立派な指導者を求めているのでしょう。

しかし、イエス様が考えておられたのは、国民の上に君臨するような、政治家ではありませんでした。人々の重荷を背負い、傷つきながら倒れてゆく、一見弱い、格好の悪い人だということです。それは、言葉を変えて言うなら、「人を助ける者として、人々に仕える生き方」でした。

考えてみれば、モーセの十戒も、最初が神様を愛すること。後半が隣人を愛することの戒めでした。政治家が、しばしば自分の名誉のために行動してしまいやすいのに対して、イエス様は、神様の栄光のため、そして、人々の幸福のため、ご自分が次々に傷ついて行かれた生涯でした。そして、その最後が十字架の死でしたが、それに倣うように、私たちが神様の栄光のため、そして周りの人々の幸せのため、喜んで傷つく生き方をする時、私たちは本当の幸福になるのではないか。

それが、日々自分の十字架を背負って行く、という生き方なのだろうと思うのです。私はこのところ、ロシアの大統領が、自分や自分の国のことばかり考えて、ウクライナの人々が自分と同じ人間であることを忘れてしまっていること。そして日本の政治家も、国民の生活ではなく、自分達の地位を維持するために行動していることに、ガッカリすることが多くなりました。そして今年からは、アメリカの大統領にも同じことを感じてしまいます。

「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われる、イエス様の言葉を思い、本当の幸せとは何なのか、本当の喜びとはどういうことか、考え直したいと思います。